「いつもの教室で、世界を体験してきた講師と学ぶ！」　独立行政法人 国際協力機構

実践校：江戸川区立 鹿本中学校　　**実践日時：平成28年11月25日**

対象学年：中学校3年生・3学級合同 115名　　**教科・単元等：総合的な学習の時間**

単元の目標

アフリカの人の暮らしの現状を学び、実感して国際理解の意識を高める。
実際に国際協力の現場で活躍していた日本人講師の体験談を聞き、３年生として学びに向けた意欲を高め、進路の決定について視野を広げる。

指導の計画

	学習活動	備考・留意点
事前学習	特に無し	
本時	・講師（元青年海外協力隊員）の話を聞く ・簡単なディスカッションを行う ・ガーナのことを支援の事例などを聞いて、身近に感じる。	
事後学習	・進路の決定に際し、話を聞いて感じたことを生かす。	

授業の構成（60分）

導入（２０分）	・講師講話。進路の決定を控える３年生向けに、自身がどうして国際支援の道に進むことになったか、経緯・経験から話す。ガーナの国の独特な挨拶を紹介（握手の代わりにお互いの指を鳴らし合う）し、実際にやってみる。
展開（３５分）	・スライドでアフリカやガーナ事情を紹介し、理解を深める。 ・写真を活用した二択のクイズ形式で、席を移動しながら行う。 ・国際協力、国際援助はどうあるべきかを生徒たちにグループで話し合わせ（５分間）、意見を聞く。決して正解はないが、「相手の立場に立って考えてみること」の大切さを生徒たちに気付かせる。
まとめ（５分）	何故、国際支援をするのか。 講師自身の考え方を伝える。

担当教員のコメント（目標の振り返りを含む）

ご自身の中学生から高校生の時代の話や、写真を多く使って頂いたので、生徒も入りやすかったように思う。日本の、蛇口をひねれば飲料用の水が出るという環境がとても恵まれていること、逆に「モノがない」と思われがちだが、実は世界中から「善意で送られるもの」であふれているという事実も知った。現地の人が本当に必要としている支援とは何なのか、教師自身としても知らないことが多く大変学びになった。今後の進路指導にも生かしていきたい。

実施団体・講師のコメント

進路を控えている３年生ということで、身近に感じてもらえるような話を、特にしたいと思った。真剣に聞いてくれる生徒も多かったように思う。今、海外で求められるのは、自国の政治・文化・歴史等についてきちんと語れるということだ。そのために英語はもちろんだが、日本人として自分の国のこともしっかりと学んでほしいと伝えた。また、日本においては、アフリカは十把一絡げでくくられるイメージが強いが実際はとても多様な地域。そうした点も実感し、理解して考えてみよう、という意欲にもつながってくれたらいい。

当該校におけるこの他のオリンピック・パラリンピック教育の取組